

○本能寺は静かうの花くたしかな
 ○アイドルと呼びたき君ら燕の子
 ○遺影の手伸びてきそうな柏餅

ゆの

弘

○走り梅雨誰も書かない伝言板
 ○遠つ世へひとつ持てゆく柏餅
 ○卯の花腐しステルスは海底に

美和

少子化の初宮詣で椎若葉
 五月闇大河の岸の水位柱
 大原の紫薊の植多つけ明日は雨

郁代

○夏来たるポニーテールの弾む朝
 ○花桐の聳える山路幾曲り
 夕まぐれ卯の花垣に灯のにじむ

道彦

○卯の花や警策はつしと肩を打つ
 ○柏餅終の棲家の梁見つつ
 五月晴折り目ピシりと黒ズボン

まり

○花桐を散らす大風元親忌
 うれしさは苺つなぎの草苺
 親譲り漉餡でつくる柏餅



○印

農子

○弟は姉より優し柏餅
 連れ立ちてランドセル行く花空木
 歯科眼科受診の続く薄暑かな

初江

○卯の花腐し一日を高知蔦屋書店
 初めてのお使い兄と柏餅
 ○卯の花や海外移住の娘を送る

笛子

○青嵐ギーコギーコと船溜り
 ○木苺の甘露をのどに深呼吸
 桑の実で唇染めた戦後孤児

富江

卯の花や友訪う道へ口ずさみ
 母の手に遥かはるかの柏餅
 旅の子と「ここ」二寧坂薄暑光

○印

味元 昭次 作品

馬齢てふ言葉噛み締む柏餅
 亡き夫のイちし卯の花月夜かな
 ○卯の花の峠越え来し菓売り



○四畳半に家族揃いし柏餅
 ○万緑や縄文人のゲノム読む
 山姥の話卯の花腐しかな

文子

○遙か来て金印の島卯波立つ
 柏餅大振り小振り蒸しあがり
 弟は干し芋の柴餅好きだった

○印